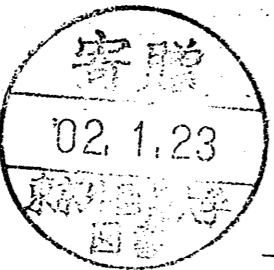


昭和十八年八月五日發行

□ 繪 ○トリチノポリー附近村落に在る偶像 ○來朝せるスバス・チャンドラ・ボース氏
○印度展覽會光景(三面) ○岡田大阪支部長就任披露會

卷頭言

●高潮時の印度と我有識者の感想	日印協會編輯部	二
●チャンドラ・ボース氏略傳	同	三四
●滯京中のチャンドラ・ボース氏副島理事會談記	三角 佐一郎	三七
●印度史上に於ける『印度人の印度』	文學博士 松本文三郎	三〇
●其農業問題より觀たる大東亞共榮圏の一環印度	農學博士 早川直瀨	四
●印度の回教問題に就て(一)	廣瀨 文雄	五六
●印度に叫ぶ	古野 忠一	五九
●日本美術と印度美術	文學博士 瀧 精一	六九
●印度燐寸工業に就て	加納藤右衛門	七九
●ベンガル州の産業と市場(三)	日印協會調査部	八三
●ネール自傳(十三)	ジャワハルラル・ネール	一〇三
◎雜 纂	同	一〇七
○最近の印度情勢○印度に對する米國の野望○印度の飢饉○新公路問題○印度の財政○大戰下の印度産業	同	一三〇
◎印度緬甸方面日誌	同	一三七
◎會務記事	同	一三九
○評議員會及總會 ○兒玉副會頭の大坂出張 ○副島專務理事の關西出張 ○印度貿易懷古懇談會 ○大阪支部長就任披露會 ○印度展覽會狀況 ○ボース氏講演會に就て ○副島專務理事のボース氏訪問 ○會員の訃報 ○新入會員	同	一四一
◎附 錄 速修ヒンディ語(其三)	佐藤 彰一	一四一



次 目

日印協會會報

第八十三號

チャンドラ・ボース氏略傳

日印協會編輯部

六尺豊かな堂々たる體軀、廣く禿げ上つた額、ロイド眼鏡の奥の炯々たる眼光、大きく強い手、ボースの風貌は渾て是れ精力の化身である。之が二十年來の宿痾を持つ人の姿であらうか。殊に一九二三年より一九二七年に至る緬甸刑務所生活に由る衰弱、一九三三年政府をして獄窓より維也納への轉地を餘儀無く認めさせた病勢の進行の如きは、斯人のどこに見出されるであらうか。それほどボースの心身は信念と熱情に溢れて居る。と同時に、斯くの如き人の健康をすら蝕む程、革命の嵐は激しかつたのである。

スバス・チャンドラ・ボースは、一八九七年ベンガル州に生れ、一九二〇年劍橋大學を卒業、印度文官試験に合格し、洋々たる希望を孕んで歸印の途に就いたのであつた。

然るに祖國は其時猛り狂ふ暴風雨のさ中であつた。即ち一九一七年のモンターギュー報告を基礎とせるローラット法が公

布せられ、公々然と暴虐の魔手が加へられるに至つて、マハトマ・ガンヂーを先頭に立てた國民會議派は、敢然反英抗爭に入つたのであつた。

ベンガルの血に滾り、且は在外中革命運動の研究に没頭し來つた俊秀の青年ボースが、如何で此の情勢を黙過し得よう。彼は職を抛ち前途を抛つて鬪争陣營に身を捧ぐべく、歸朝早甘ヂーを訪づれ、更に甲谷陀なるデシ・バンドウ・ダスの門を叩いた。時に若冠二十四歳、これぞ彼が公生涯の首途であつた。

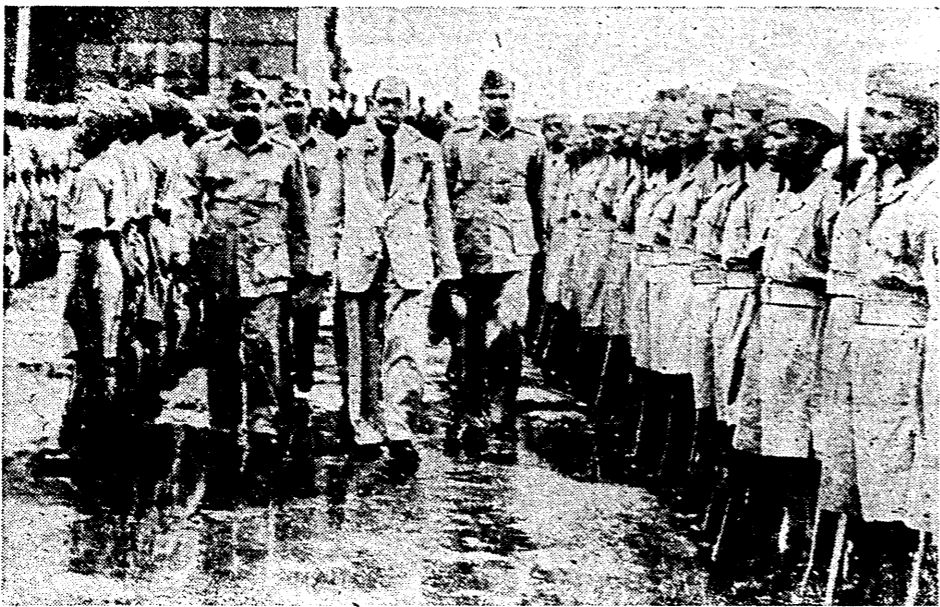
然し、常に嵐を捲き起す革命兒ボースには、ガンヂーの行き方は餘りにも生温るかつた。彼自身の言葉を借りて言へば、『革命家に非ずして改良家』であり、『國民の指導者であると共に世界教師たる一人二役を有し』、『印度人の性質は能く知つて居るが、敵ジ・ン・ブルの性質は知らざる』聖者の思想

行動は、ボースの政治的鬪争の立場から見ると、餘りにも姑息であり、杜撰であり、非常識であると思はれることが多かつた。それで彼は先づスワラジ派のダスの下に挺身し、火の出るやうな抗爭の盤渦の中に投じ、忽ち有数の指導者となり、一九二四年には既に甲谷陀首席行政官に任ぜられ、次いで市長に推され、會議派中の急進的なる樞要人物と目されるに至つたのである。

此の傾向は今に至るまでボースの一貫して變らざる所である。彼は夙に青年運動の總帥と仰がれ、勞働問題の指導者となり、何處までもガンヂー一派の無抵抗本位の消極的運動方法を是認せず、若き力を驅つて旋風の如く荒れ狂つたのであつた。

彼が二十年の革命運動史は、實に血に染み繪巻物である。今此の短い紙面には其の一端をだに書き現はし得ぬが、其の大部分の歳月を獄舎内に送り迎へた一事を以てしても、それが如何に熾烈を極めたものであるか、察するに難くはないであらう。然し其の急進的態度は益々會議派幹部の忌む所となり、一九二九年のラホール大會に於ては、遂に運用委員會から追放されるに至つた。

それにも拘らず、彼の強硬な反英抗爭は、青年層の絶對的



氏スーボ・ラドナチ・スバスの兵衛隊を衛隊

支持を受けて、愈々力強い歩みを示した。一九三〇年の大弾壓に際しては、アリポール中央刑務所に於て正視に堪へぬ打撃を受け、一時間以上も人事不省に陥つたことさへあつた。前述の如く一九三三年には十四箇月の獄中生活の結果健康が危殆に瀕し、爲に釋放されて維也納に追はれたのであるが、其の絶倫なる精神力は有らゆる困難を克服し、一九三六年にはアイレ共和国デ・ヴァレラ首相の庇護の下に、在英印度人の抗英運動をさへ指導したのであつた。翌一九三七年再び歸印するや、官憲は直に彼を捉へたが、病身の故を以て幾何ならずして釋放せねばならなかつた。

斯る間に、彼は圖らずもベンガル州知事アングソンの理解深い態度に接し、遂に暴力行使主義を一應和けるに至つた。其の結果、再び會議派の主腦部に好意を以て迎へられ、一九三八年及一九三九年には、僅に不惑を越えたばかりで其の總裁に推されたのである。

然しながら、之は一時的な協調に過ぎなかつた。彼の急進的意識は到底漸進派と相容れる事が出来ず、再び追はれるやうに其の椅子を去らねばならなくなつた。是に於て彼は黨内青年層を糾合し『完全獨立即時遂行』を叫んで前衛隊を結成した。此の前衛隊の面々は英國必死の彈壓にも拘らず、ボースの爲には獻身水火をも辭せないと言はれる。

今次大戦勃發するや、突如彼が伯林より祖國に呼びかけ、其の獨立は樞軸側、就中日本の援助に由らねばならぬことを喝破したのは今尙世人の記憶に新たな所であり、實に今回の訪日こそ意義深きものである。

彼こそは身も魂も印度革命に捧げ盡した人である。ガンヂーの如く國民の理想の表徴で宗教的崇拜の目標たる聖者でも無く、ネールの如く冷徹なる思索の結果建てた軌道の上に勇往邁進する智の人でも無く、一切を擧げて焰と化する意志と實行の人である。而も透徹せる其の頭腦は、能く世界の大勢を把持し、日本との提携を獨立達成の前提としたのである。

スパス・チャンドラ・ボース。此名こそ獨立途上の印度を飾る榮冠の世にも輝かしき三つの寶石の一つではあるまいか。



滞京中のチャンドラ・ボース氏 副島理事會談記

三角 佐一郎

盟邦獨逸から彗星の如く忽然我が皇都に其姿を現はした印度獨立運動の大立物スパス・チャンドラ・ボース氏を訪問すべく、日印協會の副島專務理事、高岡理事、小林囁託及本筆者の四名が内幸町の事務所を出たのは、折柄梅雨期特有の冷

い風が肌を撫でる六月二十五日の午後であつた。ボース氏が明日の印度建設を胸裏に藏しつゝ悠々獨立運動の祕策を練る〇〇〇の建物は、薄雲に遮られた六月の陽光を浴びて、明るく輝いて居た。

豫てからボース氏と昵懇の間柄であり、今度の來朝に際しても萬端の世話をして居た高岡理事は、今日は兩氏の紹介者なので、一足先にボース氏の部屋を敲いて案内を請うた。然るにボース氏は外出して未だ歸られないとの隨員の挨拶に、一先づボース氏の接待役〇〇氏の部屋に入つて待つ事となつ

た。〇〇氏とは私共皆舊知の間柄であつたので、暫く歡談がはずんだ。

『ボースさんが御歸りになりました。』秘書が扉の間から半身を現はして言ふ。我々は一齊に立上つた。

六尺近い巨軀を濃紺色の洋服に包んだボース氏は、私共一同を其の部屋に迎へ、手を取らんばかりにして椅子を勧め、自分も綠色の椅子に深々と腰を下し、自らライターに火をつけて煙草を勧め、軽く唇を開いて双頬に笑を湛へたまゝ私共に會話をし、改めて主賓副島理事にこやかな面差しを向け、扱て御話とは云ふしとやかな表情になる。

型通りの挨拶が済んで會談に入る。

『今日貴下に御目に懸る事が出来たのは非常な感激です。言葉で以て表し得ない喜びです。』と副島理事は椅子から半身を乗出して稍々早口に語る。ボース氏も副島理事に釣込まれたやうに椅子から半身を浮かした。想へば明治年間から前後四十年の長きに亙り、一意専心印度問題に努力して来た副島理事に取つて、今此處にボース氏と會見し、相共に刻下の重大なる印度情勢を語る機会に接したのは、何たる喜ばしい光景ぞや。十年前、否、大東亞戦争直前に於てさへ、何人が此の事態を豫想し得たであらうか。時の變轉、我が國威の驚異的伸長に、我々も無量の感慨を催さずには居られない。副島理事は更に語勢を強めて言ふ。

『我國は今を去る千四百年の昔、釋迦牟尼世尊の佛教を仲介として、所謂天竺を知つたのであります。其は世界最高の哲理を通じての魂と魂との結合でありました。今日復貴下の來朝に依つて、貴國と我國とが、魂と魂とを結び合つて居るのであります。是は何たる深い不思議な因縁でありませうか。全く人間業とは考へられませぬ。神業であります。神意であります。而も此の神意に順應し、神意を實行する事こそ、我々人間の義務であり、又特權であります。』副島理事は一氣にさう言つて言葉を切つた。聞いて居る中に、ボース氏の顔

から先程の微笑は消えて仕舞つた。炯々たる眼光、堅く引締つた口元、其は半生を苛酷な闘争に捧げ來つた愛國志士の逞しい相貌である。

ボース氏は副島理事の言葉が切れるのを待つて、大きく頷いて後の言葉を促した。副島理事は語り續ける。
『今度の戦争に當つて、我々は劍を以て地上の惡逆の徒を掃蕩する事になりましたが、是は只今申上げた通り、神の意志を行ふものであり、我々の持つ劍は降魔の利劍であります。降魔の利劍は神も佛も使用し給ふ菩薩行であり、人間も其の自覺ある限りは遠慮無く之を打揮ふべきであります。東洋の二大舊邦たる印度と日本とは、相携へて此の險難を突破しようではありませんか。』

此處で副島理事は日印協會の現勢を示す二三の書類をボース氏に手交し、日印協會は目下本邦有識者層に向つて、ボース氏に對する期待と印度獨立運動に關する見解とを求めつゝある旨を説明した。

次で副島理事は『今少し時間の餘裕があれば、協會幹部との懇談會や講演會などを開催したかつたのであるが。』と遺憾の意を表すると、ボース氏は初めて固く結んだ唇を開いて言つた。

『日本朝野の皆様と出来るだけ廣い範圍に亙つて接觸したいのが私の念願であります。差迫る政治方面の仕事が一段落付いたならば、社會的或は文化的の色々な問題に就て、各方面の方々に御目に懸つて忌憚無き御意見を伺ひ度く、貴會の御配慮を御願ひしたいと考へて居ります。然し目下の私の仕事は政治であり、政治が總てであります。』故國に於ける四億民衆の凄惨な闘争を想うてか、此の瞬間悲壯な影が氏の面に萌したが、直ぐに元の微笑を含んだ柔和な温顔に歸つて、

『滯京の豫定を變更する都合ですから……』と續け乍ら、副島理事より提供された書類に目を通す。稍々あつて、眼を上げたボース氏は、

『日印協會が四十年の長きに亙つて、日印の親善に盡力された事は感謝に堪へません。今や其の四十年の努力が立派な實を結ばうとする大切な時期に遭遇して居ります。此際日印兩國は一層緊密な連繫を保つて目的達成に努力致したいものです。』

顔を紅潮させたボース氏の口調は漸く熱を帯びて來た。故國印度に在つて四百萬黨員を叱咤激勵した熱と意志の權化たるボース氏の太い力強い聲が四邊を壓する。話題は更に新しい方面に展開して行つたのである。

和氣霽々正に十年の知己の如く會談を進める事半時間。副島理事は更に再來の時を期して自分の家庭に招待したいと希望を述べ、恰も持合はせた令孫の愛くるしい寫眞を懷中より取出して見せる。ボース氏も興深げに『是非御伺ひしたい。』と瞳を輝かして穩かな情調が室内に満ちた。

聽て會談の目的を果して腰を上げた時は、既に午後五時に近かつた。

副島理事は、つか／＼とボース氏に近寄り、其肩を抱いて、『しつかりやつて呉れ。頼む。頼む。』と連呼すれば、ボース氏も『引受けた。しつかりやる。』と深い感謝を込めた眼で副島理事を見返しつゝ首肯する。ボース氏の面には、不屈の闘魂と共に、明るい力強い希望が漲つて居た。我々一行は、明日の印度を双肩に擔ふ闘士の此の力強い而も明朗豁達な態度に滿腔の期待を感じつゝ辭去した。

